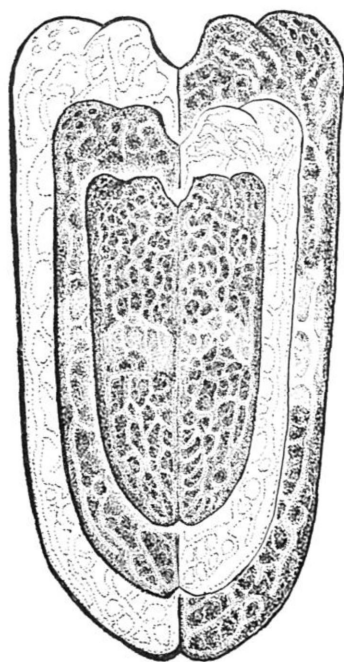


日 本 昆 虫 学 志



第1卷 第1号

(Nov. 1973)

日本鞘翅目学会

投稿規定

1. 日本鞘翅目学会々員は会誌 ELYTRA に投稿できる。
2. 投稿内容は甲虫に関連したものに限る。
3. 投稿の掲載可否および掲載時期については編集局の合議による。
4. 原稿分量は、原則として1号1篇あたり刷上がり16頁までとし、それ以上のものは2回以上に分ける。
5. 和文の原稿は横書き、原則として現代かなづかいを用いる。
6. 原著に関しては欧文表題を付すこと。
7. 欧文の原稿には和文表題を付すこと。
8. 原著には Summary (要約) を付すことが望ましい。
9. 和文の原稿では、種名は和名を主とし、学名は必要最小限にとどめる。
10. 新種および日本未記録種の記載については、必ず標本写真(原記載の場合は holotype に限る)あるいは写真に代わりうる図を付し、それらから種の特徴が判別不可能な場合には、別に図版でもってこれを補うことが望ましい。
11. 動植物の学名は、*Necydalis major* LINNÉ のように命名者は全記すること。ただし、同文中で重複する場合は省略してかまわない。
12. 文献は本文の終わりに一括して記すことが望ましい。雑誌名および巻号は省略体でよい。
(例) Ent. Rev. Japan 19, p.5~34, 1967
13. 活字の指定および校正は編集局に一任されたい。ただし、原著に関しては、初校は著者校正とする。
14. 別刷は原著に限って作成(50部以上)し、100部までは実費の半額を当会が負担し、それ以上は著者が全額負担する。
15. 掲載済の原稿は返却しない。ただし、原図・写真は希望があれば返却する。
16. 原稿の送付先は、当分の間、下記宛とする。

〒110 東京都台東区東上野4-26-8 福田惣一方, 日本鞘翅目学会

〔投稿に関する注意事項〕

- a. 和文は「～である」調を用いる。ただし、会話文はこれに当てはまらない。
- b. 欧文原稿は1行60字内外にタイプする。
- c. 未記録種の投稿に際しては、それが未記録であると考えた理由を明記することが望ましい。
- d. 分類の紛らわしい種の記録を行なう場合は標本写真を付すことが望ましい。なお、本会誌に用いるための標本写真撮影は当会にても行なうので、希望者は事務局宛に連絡されたい。
- e. 写真および図版は出来上り予定寸法の1.5倍程度に製作するとよい。
- f. 採集データ(和文)は次のように略記すればよい。
5 ♀♂ 1 ♀, 群馬県武尊山, 16. VII. 1970, 衣笠恵士採集
- g. 原稿は編集局により一部変更されることがあるが、変更箇所が内容に及ぶ場合はあらかじめ著者の了解を求める。また、不備な原稿は書き直しを要求することもある。

Necydalis 属の研究史(I)[†]

草 間 慶 一[†]

(静岡大学理学部)

1. 発 端

Necydalis 属の歴史やこの属のタイプ種およびその指定について調べてみようと思いついたのは、LINSLEY (1963年)¹⁾ が *Molorchus* 属のタイプ種の所で、「*Molorchus* と *Necydalis* のタイプ種は疑問で、確定されていない」と書いており、また CHEMSAK (1964年)²⁾ も *Necydalis* のタイプ種について同様に、「*Molorchus* とのタイプ種の疑問は解決されていない」とあったからで、専門家が調べて不明ならば自分が調べて解決できると思わないが、どこが不明で決定できないのか知りたいて考えて文献をあさりだした。昨年ちょうど10年目に、はからずも多摩動物公園の高家博成氏より教えて載った文献により、一応自分なりにある程度この問題が解決できたと思っている。

Necydalis 属の歴史を調べるとということは、そのままカミキリの研究史を調べることの重要な一端を担うことにもなるので、歴史的に述べてみることにする。

まず、*Necydalis* とはどういう意味だろうか。小島圭三・林匡夫氏の原色日本昆虫生態図鑑1 (1969年) にはカミキリの属の語源が非常によく入っているが、*Necydalis* の所は不明となっている。MULSANT (1839年)³⁾ によると、ギリシャ語 νεκύδαλος (*nekýdalos*) からで、「絹を生産するカイコのサナギを示すために、アリストテレスにより使用された名前」とある。

1758年、LINNÉ は *Systema Naturae* の第10版中でこの語を借用した⁴⁾ が、この他 *Coleoptera*, *Diptera* もアリストテレスが作った語を LINNÉ が採用した例である。

2. LINNÉ の属について

前にも書いたことがある⁵⁾ が、1758年に LINNÉ が *Necydalis* 属を設立した時、彼はこれがカミキリであるとは考えず、ハナノミ科 (*Mordella* 属) とハネカクシ科

(*Staphylinus* 属) の間に置いた。その時この属には *major* と *minor* の2種が含まれていた。これらの種はいずれも1758年以前から知られており、名前もついていた。これら2種の LINNÉ の記載を訳してみると、

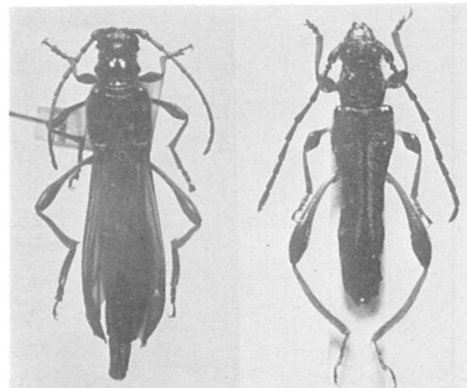
N. major: 翅鞘は赤褐色で斑紋はない、触角は体長より短い

SCBÄEFFER モノグラフ1753, 図1, 2
Musca-Cerambyx major
ヨーロッパに産する

N. minor: 翅鞘は黄褐色、先端に白い線状の紋、触角は体長より長い

Fauna Svec.⁶⁾ 697, *Necydalis*
翅鞘は黄色で白い線模様
SCBÄEFFER モノグラフ1753, 図6, 7
Musca-Cerambyx minor
ヨーロッパに産する

とある。これで明らかなように、*minor* の方はすでにスカンジナビア地方のファウナを書いた第1報 (1746年)⁶⁾ に入っており、この種に対して *Necydalis* なる属名が与えられているが、*major* の方については何も記載されていない。なお *Musca* は現在、イエバエの属名に用いられている。もちろんこれら1758年以前の文献は動物界の分類学には引用されないのであるが、1800年代後半



第1図 *Necydalis* と *Stenopterus* の例
左: *Necydalis major* LINNÉ ♀
右: *Stenopterus rufus* LINNÉ ♂

[†] KUSAMA, Keiichi: Historical Review of *Necydalis* (Cerambycidae) (I)

第1表 1767年に *Necydalis* に属していた種と現在の取り扱いについて

頁	番号	種名	現在の科と属	備考
641	1	<i>major</i>	<i>Necydalis</i>	本種の命名者は SCHREBER (1759)
	2	<i>minor</i>	<i>Molorchus</i>	
	3	<i>umbellatarum</i>	<i>Molorchus</i>	
642	4	<i>coerulea</i>	カミキリモドキ科	現在の種名は <i>ater</i> 現在の種名は <i>rufus</i> <i>Leptura necydalea</i> LINNÉ (1758) のシノニム
	5	<i>atra</i>	<i>Stenopterus</i>	
	6	<i>rufa</i>	<i>Stenopterus</i>	
	7	<i>glaucescens</i>	<i>Isthmiade</i>	
643	8	<i>flavescens</i>	カミキリモドキ科	
	9	<i>podagrariae</i>	カミキリモドキ科	
	10	<i>simplex</i>	カミキリモドキ科	
	11	<i>brevicornis</i>	カミキリモドキ科?	

第2表 *Necydalis* とその関連する属

著者	年代	翅鞘の短縮しているもの	翅鞘の狭く細くなるもの
LINNÉ, 1758		<i>Necydalis</i>	ナ シ
"	, 1767	<i>Necydalis</i>	<i>Necydalis</i>
FABRICIUS, 1775		<i>Leptura</i> の一部	<i>Necydalis</i>
"	, 1792, 1801	<i>Molorchus</i>	<i>Necydalis</i>
SCHRANK, 1798		<i>Gymnopteron</i>	不明
ILLIGER, 1804		不明	<i>Stenopterus</i>
LATREILLE, 1804, 1807		<i>Molorchus</i>	<i>Necydalis</i>
LEACH, 1815		<i>Molorchus</i>	<i>Necydalis</i>
CURTIS, 1824		<i>Molorchus</i>	<i>Necydalis</i>
LATREILLE, 1829		<i>Necydalis</i>	<i>Stenopterus</i>
STEPHENS, 1831		<i>Molorchus</i>	<i>Stenopterus</i>
SERVILLE, 1832		<i>Necydalis</i>	<i>Stenopterus</i>
CURTIS, 1834		<i>Necydalis</i>	ナ シ
STEPHENS, 1839		<i>Necydalis</i>	<i>Stenopterus</i>
WESTWOOD, 1839~40		<i>Necydalis</i>	<i>Stenopterus</i>
MULSANT, 1839		<i>Necydalis</i> , <i>Molorchus</i>	<i>Stenopterus</i>
NEWMAN, 1840		<i>Necydalis</i> , <i>Heliomanes</i>	不明
WHITE, 1855		<i>Necydalis</i> , <i>Heliomanes</i>	<i>Stenopterus</i>
C.G. THOMSON, 1859		<i>Necydalis</i> , { <i>Molorchus</i> <i>Caenoptera</i> *	不明
J. THOMSON, 1860, 1864		<i>Necydalis</i> , <i>Molorchus</i>	<i>Stenopterus</i>
MULSANT, 1862		<i>Necydalis</i> , { <i>Molorchus</i> <i>Linomius</i> * <i>Sinolus</i> *	<i>Stenopterus</i>
FAIRMAIRE, 1864		<i>Necydalis</i> , { <i>Molorchus</i> <i>Conchopterus</i> **	<i>Stenopterus</i>
LACORDAIRE, 1869		<i>Necydalis</i> , { <i>Molorchus</i> <i>Conchopterus</i> **	<i>Stenopterus</i>

* 3者とも *Molorchus* の亜属として記載された。

** FAIRMAIRE (1864) が属として記載したもの。

での論争の所で出てくる。

1767年, LINNÉ は *Systema Naturae* の第12版で, *Necydalis* を *Leptura* の次に置くと同時に, 新たに9種を追加した。この追加された種の中では *umbellatarum* のみが翅鞘の短縮された従来と同じグループのもので, その他は翅鞘の狭く細くなっている種であったため, その後の混乱を引き起す原因となった。この追加された種を第1表に示した。

3. FABRICIUS の属について

FABRICIUS が1775年に彼の昆虫の分類を発表した時, LINNÉ の *Necydalis* が雑然としていたので, それを整理して彼の *Necydalis* には翅鞘が狭く細くなるグループの種のみを入れた。そのためカミキリとしては, 現在の分類で *Stenopterus* 属に入っている *rufa* と *atra* のみであった⁷⁾。

一方, 翅鞘の短縮された種に対しては,

- Leptura abbreviata* (=major)
- L. *dimidiata* (=minor)
- L. *umbellatarum*

として, 最初の LINNÉ の種名を採用しなかった。

1792年に *Molorchus* 属を新設して⁸⁾, *Leptura* 中の上記3種とオーストラリア産の *variegata* (現在の *Hesthesis*) の4種を含めた。そして *major* と *minor* をそれぞれ *abbreviata* と *dimidiata* のシノニムとしている。

また, FABRICIUS の *Necydalis* の方は26種となったが, このうち現在カミキリと認められているのは, No.11, *atra*; No.17, *rufa*; No.18, *praeusta* (現在 *Stenopterus*); No.24, *glaucescens* (現在 *Isthmiade necydalea*) の4種で, 他はジョウカイボン科, カミキリモドキ科などであった。

1801年の論文⁹⁾ も以前と同じ意見で, 翅鞘の短縮した *Molorchus* はやはり4種と変化がないが, 狭く細くなるグループの種を含む *Necydalis* の方は33種に増加している。

4. *Necydalis*, *Molorchus* および *Stenopterus* 属の関係

今まで述べたように, *Necydalis* に対する LINNÉ の定義の不確かさと, LINNÉ と FABRICIUS との間の最初からの属の性格の違いが, その後の混乱と論争の原因となった。これを年代を追って眺めてみることにする。

1804年, ILLIGER¹⁰⁾ は翅鞘の狭くなっている種類に *Stenopterus* なる新属を作り, *rufus*, *ater* として LINNÉ の *rufa*, *atra* を含めたが, この属は1829年の

LATREILLE および 1831年の STEPHENS によって採用されるまで, まったく無視されてしまった。

当時の主流を占めていた LATREILLE の分類は, 1804年¹¹⁾から

- { 翅鞘が非常に短い……………*Molorchus*
- { 翅鞘が錐状である……………*Necydalis*

との意見を変えていない。これに LEACH, CURTIS などのイギリスの昆虫学者も同意している。

第2表に示したように, 1830年頃までは FABRICIUS や LATREILLE の分類にしたがっていたことが判る。*Stenopterus* が再認識されて後は, 短縮種に *Necydalis* を当てるか, *Molorchus* にするか意見が分かれていたが, 1840年頃までは現在の3属は2属にまとめる人が大部分であった。

翅鞘の短縮されている種類をさらに2属に分けたのは1839年のフランスの昆虫学者 MULSANT が最初である。彼の分類の検索表を示すと,

- { 触角は細長く, 体と同じか, または長い。第3節は第5節と等しいか, またはほとんど等しい……………*Molorchus*
- { 非常に短い { 触角はずんぐりしており, 体長の $\frac{2}{3}$ にはほぼ等しい。第3節は明らかに第5節より短い……………*Necydalis*
- { 腹部の長さとはほぼ同じ, しかし肩部の少し下から急に狭くなり, 先端はとがり, そしてその先端の間は大きく開いている……………*Stenopterus*

このようにして3属に分け, その中に含まれる種については, 第3表に現在の学名と共に示した。

第3表 MULSANT (1839) の分類

MULSANT	現 在
<i>Molorchus</i>	<i>Molorchus</i>
<i>Dimidiatus</i> ; FAB.	<i>minor</i> LINNÉ
<i>Umbellatorium</i> ; LINN.	<i>umbellatarum</i> SCHREBER
<i>Necydalis</i>	<i>Necydalis</i>
<i>Major</i> ; LINN.	<i>ulmi</i> CHEVROLAT
<i>Salicis</i> ; DUPONT*	<i>major</i> LINNÉ
<i>Stenopterus</i>	<i>Stenopterus</i>
<i>Rufus</i> ; LINN.	<i>rufus</i> LINNÉ
<i>Praeustus</i> ; FAB.	(<i>ater</i> のシノニム)
var. <i>Ater</i> ; FAB.	<i>ater</i> LINNÉ
<i>Ustulatus</i> ; DEJ.	(<i>ater</i> の変種)

* 本文中(112頁)ではこの学名を使用しているが, 付図(pl. 1, fig. F)の説明には, 本文でこの種のシノニムにしている *Molorchus populi* BÜTTER (Mag. Ent. Germer, 3, p. 245, 1818)の方が書かれている。なお *Salicis* について DUPONT の記載は見あたらず, 現在では *Salicis* MULRANT として引用されている。

一方、イギリスの昆虫学者 NEWMAN はフランスの MULSANT とはまったく別の解決法を1840年に示した。彼は New Holland (オーストラリア) のカミキリを記述するにあたって¹²⁾、新属 *Heliomanes* を作り、これに *H. sidus* NEWMAN なる新種を記載し、*Necydalis* にも新種 *N. auricomus* NEWMAN を入れた。そして同じ年の別の雑誌¹³⁾において次のように主張している。

「*Heliomanes* NEWMAN (1840) なる属は、New Holland からの新種 *sidus* を受け入れるために作られた属であるが、タイプ種は *H. minor* すなわち *Necydalis minor* LINNÉ である。その他この属に追加される種としては *umbellatarum* LINNÉ で、両者ともヨーロッパ、イギリスに産する。またアメリカ合衆国の北部に産する *H. bimaculatus* (*Necydalis bimaculatus* SAY) もこの属に入る。

Necydalis は LINNÉ の著書の第12版で性格が確定された属で、LINNÉ は2つの Section に分けている。第1の Section は *major*, *minor* および *umbellatarum* で、第2の Section は種々の Heteromerous beetles (異節の甲虫) を含んでいる。FABRICIUS は Systema Eleutheratorum⁹⁾で、何らの理由も記述せずに1新属と2つの新名を作った (以下 *Molorchus* および *abbreviata* と *dimidiata* などのことについて説明しているが、このことはすでに前項の FABRICIUS の所で述べているので省略する)。

1840年に私 (NEWMAN) は属を分けて、*Necydalis* にはヨーロッパ産の *major* LINNÉ をタイプ種とし、2番目の種として New Holland の *N. auricomus* を追加する。」

結局のところ NEWMAN は *Molorchus* FABRICIUS は *Necydalis* のシノニムであり、そのため *Molorchus* (現在我々の使用している内容の属) に対して新属 *Heliomanes* を提案したのである。NEWMAN の主張は客観的に見て正しいと思うし、また2つの属の性格もきちっと記述しているが、残念ながら現在の時点において考えると2つの欠点を持っていたと思う。

(i) 属のタイプ種の指定を、その新属を記述した論文中ではなくて別の論文中で行なっているので、現在の命名法から考えると *Heliomanes* のタイプ種を *minor* とすることはできず、*sidus* が monobasic でタイプ種となる。

(ii) 彼が *Necydalis* の性格を記述した時に入れた種 *auricomus* は、その後別属であるとされたこと。

現在における処理では *Heliomanes* は *Molorchus* のシノニムとされている。また *auricomus* を AURIVILLIUS (1912)¹⁴⁾ は *Hesthesis* NEWMAN (1840) とし、

その後 MCKEOWN (1945)¹⁵⁾ は *Proagapte* MCKEOWN (1945) (これは *Agapete* NEWMAN, 1845年の置換属として提案された属) に移し、Tribe も *Necydalini* から *Bimiini* に変更した。

文 献

- 1) LINSLEY, E.G.: The Cerambycidae of North America, Part IV, Univ. Calif. Pub. Ent. **21**, p.157 (1963)
- 2) CHEMSAK, J.E.: Type Species of Generic Names Applied to North American Lepturinae, Pan-Pacif. Ent. **40**, p.233 (1964)
- 3) MULSANT, M.E.: Histoire naturelle des Coléoptères de France, Longicornes, p.110(1839)
- 4) LINNÉ, C.: Systema Naturae ed. 10, p.421 (1758)
- 5) 草間慶一: カミキリムシの研究史(1), 甲虫ニュース, No.12, p.1 (1971)
- 6) LINNÉ, C.: Fauna Suecica sistens animalis Sueciae regni ed. 1 (1746); ed. 2 (1761)
- 7) FABRICIUS, J.C.: Systema Entomologiae, p.209 (1775)
- 8) FABRICIUS, J.C.: Entomologia Systematica, p.356 (1792)
- 9) FABRICIUS, J.C.: Systema Eleutheratorum **2**, p.371~375 (1801)
- 10) ILLIGER, J.C.W.: Familien, Gattungen und Horden der Käfer von Latreille, Mag. Insektenk. **3**, p.120 (1804)
- 11) LATREILLE, P.A.: Histoire naturelle, générale et particulier des Crustacés et des insectes **2**, p.282~322 (1804)
- 12) NEWMAN, E.: Nonnullorum Cerambycitarum novorum, Novam Hollandiam et Insulam Van Diemen habitantium characteres, Australasian Longicorns, Ann. Nat. Hist. London **5**, p.14~21 (1840)
- 13) NEWMAN, E.: Entomological Notes, Entomologist **1**, p.20 (1840)
- 14) AURIVILLIUS, C.: Coleopterorum Catalogus, Par **39**, Cerambycidae, Cerambycinae, p.286 (1912)
- 15) MCKEOWN, K.C.: Rec. Aust. Mus. **21** (6), p.291 (1945)

屋久島産ホシハナノミ属の未記録種について

高桑 正敏*・畑山 武一郎**

鹿児島県屋久島におけるハナノミ科ホシハナノミ属としては、キボシハナノミ・オオキボシハナノミ・コモンホシハナノミの3種が報告されているが、筆者らは次の屋久島産3種を新たに記録しておく。

1. シラホシハナノミ

Hoshihananomia perlata SULZER

- 1♂, 永田, 20. vii. 1966, Sugiyama 採集
- 1♀, 小杉谷, 16~18. vii. 1968, 酒井香採集
- 1♀, 小杉谷, 20. vii. 1968, 畑山武一郎採集

屋久島産は上記1♂2♀しか検していないので明らかとは言えないが、北海道・本州・四国産と比較すると、♂♀ともに尾節板の形状を異にし、また♂ゲニタリアにも違いが認められる。

2. ウスキボシハナノミ

H. kurosai CHUJO et NAKANE

- 1♂, 宮之浦林道, 23. vii. 1971, 畑山武一郎採集
- 1♀, 宮之浦林道, 6. vii. 1972, 長尾悟採集(写真)

上記♂はオオキボシハナノミ♂の黒化個体にきわめて似るが、上翅基部の会合線に黄色毛を持たないことと、尾節板がよりとがることで区別できる。またこの♂は上翅肩部側方寄りに黄褐色の痕跡的なやや丸い紋を持つ。上記♀は本州産ととくに差は見い出せない。

3. ニセキボシハナノミ

H. katoi NAKANE et NOMURA

- 1♂, 宮之浦林道, 18. vii. 1969, 畑山武一郎採集
- 1♂, 宮之浦林道, 14. vii. 1971, 小宮次郎採集
- 1♀, 坪切山, 20. vii. 1970, 入江平吉採集(写真)



左：ウスキボシハナノミ♀
右：ニセキボシハナノミ♀

4♂♂4♀♀, 宮之浦林道, 20~22. vii. 1971, 畑山武一郎採集

畑山の4♂♂4♀♀はウスキボシハナノミ1♂とともに樹種不明の白色花上より得た。

末筆ながら上記の標本を懇与され、発表を快諾された各氏に感謝申し上げます。

* (〒236 横浜市金沢区六浦町3577)

** (〒606 京都市左京区高野竹屋町37 宮川方)

北海道苫小牧における

エゾアオタマムシの採集例

秋山 黄洋



エゾアオタマムシ *Eurythyrea eoa* SEMENOW はアオタマムシ *E. tenuistriata* LEWIS に似るが、北海道のみに産し、後者の上翅端が二歯状突起となるのに対して、エゾアオタマムシは一歯で終わるので容易に区別できる。

少々古い採集例ではあるがほとんど記録されていないために、採集者の清水昭平氏の許可を得て発表する。

1 ex., 苫小牧市水源地, 20. vii. 1961, 清水昭平採集

上：全体写真
下：上翅端拡大写真
同氏の話によると、草むらの上に止まっていたそうである。なお標本は筆者が保管している。

(〒235-02 横浜市磯子区坂下町1-43)

マダラクワガタの採集例と食樹に関する一知見

藤田 宏

マダラクワガタ *Acsalus asiaticus* LEWIS は本州では中山帯に見られ、日本全土に分布するが個体数の少ない種とされている(朽木中からはまとまって採集されることもある)。

本種の採集例と、食樹に関しての一知見を知り得たのでここに報告する。

1 ex., 東京都下奥多摩川乗谷, 9. vi. 1968, 郷遠採集そだのピーティングによる。

1 ex., 静岡県伊豆遠笠山, 12. iv. 1969材採集, 4. iv. 1971羽化脱出(東京都内), 宮原道則採集。

タンナサワフタギの枯木より羽化脱出したとのこと。

菅見(1971, 高縄半島のマダラクワガタ, *Ishizuchi* 2 (1)) による愛媛県下の記録ではサクラおよびカエデ・ミ

ズキと思われる朽木中などより採集されているが、おそらく広葉樹の朽木であればかなりの雑食性を示すものであろう。大沢昭夫氏もやはり遠笠山のタンナサワフタギより本種を1 ex. 羽化脱出させている。

末筆ながら、標本を恵与され、発表を許された郷遠・宮原道則両氏に感謝する。

(〒110 台東区台東2-29-6)

四国におけるマメクワガタの記録

小笠原 隆



マメクワガタ *Figulus punctatus* WATERHOUSE の分布は伊豆諸島御蔵島および九州以南とされ、四国における記録はまだないようなのでここに報告しておく。

1 ex., 高知県足摺岬, 12. vii. 1969, 中山絃一採集保管

1 ex., 高知県長岡郡大豊町穴内, 9. vi. 1973, 小笠原隆採集, 藤田宏保管(写真)

足摺岬のものは朽木上にて。

また穴内のもはチップ工場の貯木場の材上より得られた。

なお、貴重なデータを提供して下さった中山絃一氏に感謝する。

(〒780 高知市西秦泉寺420-19)

四国のカミキリ5種

小笠原 隆*・松村 英一**

筆者らは1972年、四国において興味深いと思われる次の5種のカミキリを採集したので報告する。

1. トゲウスバカミキリ

Megopis nipponica MATSUSHITA

1♂, 高知県長岡郡本山, 4. viii. 1972, 小笠原保管
市内の小学生より。林の中の樹上で採集とのこと。

2. ヒゲジロホソコバネカミキリ

Necydalis odai HAYASHI

1♂, 徳島県剣山, 30. vii. 1972, 松村英一採集
夫婦池付近の枯枝のピーティングで得られた。

3. トガリバホソコバネカミキリ

Necydalis formosana KANO

3♂♂ 1♀, 高知県土佐郡土佐山村工石山,
2. vii. 1972, 小笠原隆・松村英一採集

これらはすべて、1本のハイノキ(サワフタギ科)の立枯れより得られたが、本州・九州においては、タンナ

サワフタギ・サワフタギの立枯れより得られ、また羽化脱出している。ハイノキはおもしろい記録と思われる、新食樹となる可能性も十分に考えられるので、今後も調査を続行する。

4. カエデヒゲナガコバネカミキリ

Molorchus ishiharai OHBAYASHI

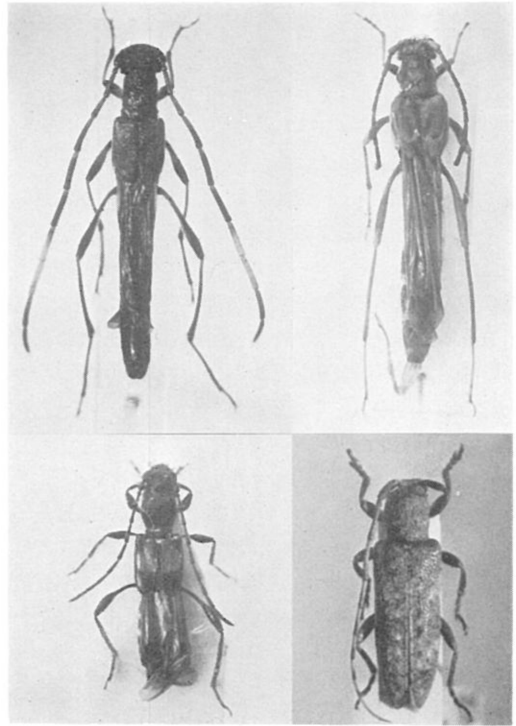
1♀, 高知県梶ヶ森, 30. iv. 1972, 小笠原隆採集

カエデの花上より得られたが、四国ではかなり稀な種と思われる。

5. ヒトオビチビカミキリ

Sybra unifasciata FUJIMURA

1♀, 高知県工石山, 17. vii. 1972, 小笠原隆採集
枯づるのピーティングで得られた。



左上: ヒゲジロホソコバネカミキリ♂
右上: トガリバホソコバネカミキリ♀
左下: カエデヒゲナガコバネカミキリ♀
右下: ヒトオビチビカミキリ♀

以上5種のカミキリムシにつき同定・御教示下さった中山絃一氏、また発表を勧めて下さった藤田宏氏に感謝したい。

* (〒780 高知市西秦泉寺420-19)

** (〒780 高知市和泉町10-29)

奥日光大沢でカラフトホソコバネカミキリ
を採集

下村 徹

1971年7月18日、群馬県奥日光大沢の貯木場（この材は仁加又沢などから伐採されてきたもの）で針葉樹の材上に止まっていたカラフトホソコバネカミキリ *Necydalis sachalinensis* MATSUMURA et TAMANUKI 1♂を採集したので報告する。

採集した当時はまったくオオホソコバネカミキリの♂かと思いついていたが、月刊むし19号誌上に鈴木和利氏により南アルプス二軒小屋で採集されたカラフトホソコバネカミキリが発表されて、筆者の採集品に疑問を持ち、郷遠氏に見ていただいたところ、カラフトホソコバネカミキリに間違いはないということになった。そしてまた、南アルプス産の標本と比較する機会を作ってもらい、その結果、前胸背や上翅の形状、脚の色などから確かにカラフトホソコバネカミキリ♂と同定された。

この報告にあたり、標本写真、同定など全面的に御指導していただいた郷遠氏、また貴重な標本を見せていただいた鈴木和利氏に心から深謝い

たしたい。

(〒140 品川区大井3-1-17)

秋田県でツシムムナクボカミキリを採集

斎藤 秀秋

ツシムムナクボカミキリ *Cephalallus unicolor* GAHAN は南方系の種で、これまでは東北地方からの記録を見ていない。筆者は秋田県田沢湖にて本種を採集したのでここに記録する。

1 ex., 秋田県田沢湖駅, 17. viii. 1971, 斎藤秀秋採集 駅構内の貯木場の針葉樹の裏側についていたもので、他にサビカミキリ 9 exs. を採集。

なお、未発表ながら、本種は東北地方からは他に、福島県湯ノ花・青森県下でも採集されていると聞く。

(〒154 世田谷区弦巻4-2-17 くるみ荘30号)

北海道にてコジマヒゲナガコバネカミキリ
を採集

糸 久仁雄

1972年6月24日、北海道札幌市篠舞付近のゴトウヅル花上に飛来したコジマヒゲナガコバネカミキリ *Molorchus kojimai* MATSU-SHITA 1♀を採集した。従来、本種の北海道における記録はなかったと思われるのでここに報告させていただきます。

なお、本花上では本種の他にサドチビアメイロ・マツシタトラ・カエデノヘリグロハナ・クロサワヘリグロハナ・モモプトハナなどのカミキリが採集された。サドチビアメイロカミキリは花上よりもむしろゴトウヅル葉上を徘徊して

いる個体の方が多いようである。

(〒165 中野区江古田2-1-2)

北海道におけるナカバヤシモモプトカミキリ
の採集例

安井 正*・生島 典明**・下村 徹***

ナカバヤシモモプトカミキリ *Leiopus guttatus* BATES は北海道から九州まで分布しているが、筆者らの知る限りでは、神奈川県横浜南部の六国峠付近を除いてはあまり多いものではないと思われる。筆者らは北海道定山溪と十勝支庁幌加から本種を採集したので報告する。

1♂, 十勝支庁三股盆地幌加, 24~28. vii. 1972, 下村徹採集(写真)

貯木場でトドマツ?の材上より多数採集したヒゲナガモモプトカミキリの中に入っていたもので、この個体は横浜市六国峠産のものと比較するとかなり黒化している。

2♀♀, 札幌市定山溪, 24. vii. 1972, 安井正・生島典明採集



無意根山の薄別登山口からの林道の主にトドマツ・ダケカンバの伐採地(標高約650m)で、トドマツの伐採木上より採集した。今回の8月下旬の記録は、時期的にも面白いと思われる。

*(〒065 札幌市北26条西6丁目)

** (〒065 札幌市北33条東15丁目)

*** (〒140 品川区大井3-1-17)

奥多摩でトワダムモンメダカカミキリを採集

森 祐二郎

東京都下奥多摩においてコナラのそだをビーティングしたところ、トワダムモンメダカカミキリ *Stenhomalus lighti* GRESSITT を得たので報告する。

1 ex., 都下西多摩郡奥多摩町峰谷, 3. V. 1973, 森祐二郎採集

なお、奥多摩における本種の採集例としては、日原付近での未発表の採集例が1、2例あると聞く。

(〒166 杉並区高円寺南5-8-7)



秋期ビーティングによるカミキリ2種

藤田 宏

1972年10月10日、山梨県大菩薩へノブドウの枯づるなどを求めて登山した際、ついで行なったビーティングにて次の種のカミキリを採集したので報告する。当日の朝は吐く息も白くなる寒さであった。

1. ナカジロサビカミキリ

Pterolopia jugosa (BATES)

1 ex., 山梨県大菩薩嵯峨塩付近, 10. X. 1972

そだをビーティングして得た。

2. カスリチビカミキリ (シロオビドイカミキリ)

Nipposybra fuscoplagiata BREUNING

1 ex., 山梨県大菩薩沼ノ窪付近, 10. X. 1972

モミの枯枝より。6月下旬に同行者が採集した際はまだ赤い枯葉のたくさんついた新しい枯枝より採集されていたが、今回は枯葉の残っていない比較的古い枯枝より得られた。ビーティングネットの上に落ちるとすぐ歩き

だし、なかなか活発であった。

(〒110 台東区台東2-29-6)

山梨県大菩薩における

ヒゲナガヒメルリカミキリの記録

高桑 正敏

ヒゲナガヒメルリカミキリ *Praolia citrinipes* BATES は比較的南方系の種で、関東周辺においては高尾山と天城山より記録があり、また未発表ながら房総半島清澄山にも産すると聞くが、これまで山梨県下での採集例を知らない。筆者は森下和彦氏の採集標本中から大菩薩産の本種を見出したが、同氏の依頼により筆者が代わって発表しておく。

1 ♀, 山梨県東山梨郡田野〜嵯峨塩間, 13. viii. 1967, 森下和彦採集所有

森下氏によると、この個体は灌木葉上に静止していたということである。

(〒236 横浜市金沢区六浦町3577)

屋久島におけるカミキリ2題

酒井 案理

1972年7月14日、鹿児島県屋久島の栗生(大川林道)において採集を行なった際に、次の2種を採集したので報告しておく。

1. オニホソコバナカミキリ

Necydalis gigantea

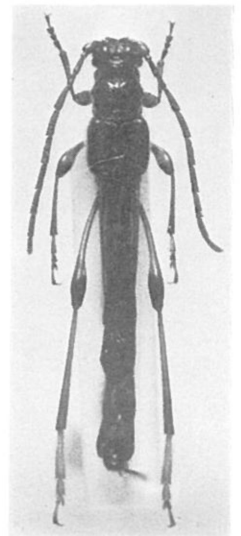
KANO 2 ♀♀ (写真)

2. ケブカトラカミキリ

Hirticlytus comosus

MATSUSHITA 1 ♀

なお、オニホソコバナカミキリは、屋久島においては和田潤(1972, 月刊むし10号, p.35)による1 ♀に次ぐ記録と思われ、やはり本州産の個体と比較すると小型(体長20mm, 22mm)で幾分黒化し、また前胸背の点刻ははるかに深いなどの差異がある。



(〒177 練馬区関町1-125)

1972年カミキリ界の総括

ふじた ひろし

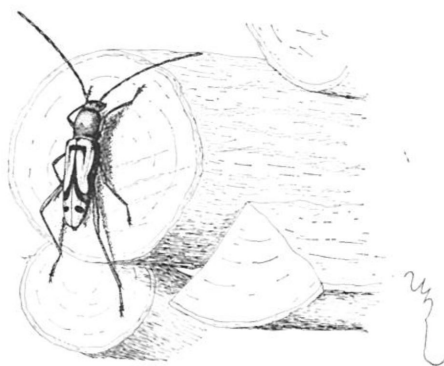
1972年もまた、その採集者人口では虫屋国会野党第1党? ともなったカミキリ界にとって激動の年であったわけで、とりわけ年ごとに目立ってくるヤングパワーにはすさまじいものがあった。これら若手の中には冬でもシーズン中であるかのごとくカミキリムシの顔みたさで(もちろんその多くは幼虫の顔なのであるが……)山野に出没する者も少なくなく、神奈川県川崎付近の輸入材からクロボシスギカミキリが多数採集されるといった一幕も彼らのクレージーパワーが生んだ所産であったと言えよう。

○春は年中行事から

本格的シーズンの到来は、新緑の中でカエデの花を叩いた瞬間に初めて感ずるものであるが……ここ東京都下の高尾山ではなぜかそのような姿はあまり見られず、多くの人が満開のカエデの木の下でネットを手にじっと座りこんでいる。春の年中行事の最たるもので、「高尾ヒラヤマ決戦」とか呼ばれている代物なのである。毎年20~30人ものカミキリ屋がひしめくこのケーブルカー脇のわずかな面積の土手は、4月中旬より5月初めの頃まで赤い小さな虫を巡っての数々の悲喜劇を生み出す舞台と化し、この土手一帯を飛んだ虫は皆白いネットの洗礼を受けることとなる。中には(ヤケツソか?) 毒ビンの中にヒラヤマ以外の赤い虫は全部入っていたような御仁もいたとか。こう大勢で押し寄せてみても、帰りの電車賃を喜んで払える光栄を享受できる人は1日1人いるかい



ヒラヤマ求めて群がるカミキリ屋



ないかといった調子で、結局、昨年採集されたヒラヤマコブハナは当地で1♂9♀♀の他、同じ東京都下の奥多摩川井で1♀(小田義広氏)、京都府芦生で1♂(中村俊彦氏)、兵庫県氷ノ山で1♀(同泉初記録、畑中熙氏)といったところ。——採集地集中化が問題となっている昨今ではあるが、一面、この「野外サロン」のごとき楽しいムードはなかなか捨てがたい味がある。

ヒラヤマ以外の春の行事をすこし pick up してみよう。まずモンクロベニは当たり年だったようだ。和歌山県御坊亀山では相当多数(1968年以来)、また、岡山県でも久々に美袋宇山・広瀬鶏足山などで割と得られたが、和歌山県ではほとんどがクスギなどの切株や薪に見られたのに対し、岡山県では切株に生えたひこばえの葉上に止まっていたものが大部分だった。

モンクロベニと並び、関西には「春日エゾトラ決戦」という行事も存在するらしい。こちらでも今年是好調で6頭ほど得られたのだが、例によって「京都イモイモカルテット」および「大阪イモイモカルテット」のメンバー諸氏のネットにはかすりもしなかったという(杉野広一氏談)。

長野県上伊那郡の戸台付近では、コナンなどの花上でクロツヤヒゲナガゴバネ数頭(同時に今までウスグロヒゲナガゴバネとされていた別種も10数頭得られた)・カエデノヘリグロハナ・シラホシヒゲナガゴバネ・トウキョウトラなどの他、フタスジカタビロハナも多数採集されるなど(5月中旬)なかなか多彩な顔ぶれが見られた。

また、学生勢にとってはすでにシーズン開幕前、恒例の春の奄美があったわけで、こちらの方もコバルトヒゲナガゴバネ6頭という



今村佳英氏

豊作ぶりを筆頭に、キンケチャイロ1♂(初記録, 大和浜, 今村佳英氏)・ニイタカハナ2♂♂1♀(湯湾岳・八津野)・アラカワシロヘリトラ2頭の他, アマミアカハネハナ・アマミリンゴは多数採集されるなど, 盛況だったもよう。

○6月の学生勢・社会人勢

ヒラヤマ以後は少しの間おとなしかった関東の若手連も, 6月の声を聞くと, またも集中癖をもつ輩が福島県南会津へと向かう。数週間も新田原のお堂に泊まり込み連合赤軍とまちがえられたおかげで地元警察まで呼びこんだという清野隆氏(蛇足だがその後, 北海道でも変な小屋に泊まってまちがえられたのだ!)を始めとした若手連の猛攻にあっては, かつての秘境ムードもどこへやら。今まで当地より紹介された珍品はほとんど多数採集された以外に, 湯ノ花ではヨコヤマトラ1ex・トウキョウトラ4exs・マダラゴマフ1♂1♀(当地2・3頭目の記録)や, 未確認ではあるが, ムモンベニも2exs.得られたと聞く。

檜枝岐方面も種類数・個体数共に劣らず多く, ミズキの花や薪で, フタスジカタビロハナ1ex・エゾトラ1ex.(共に当地2頭目)・トウキョウトラ2exs・カエデノヘリグロハナ・ミヤマルリハナ・タカオメダカ・トホシなどが採集され, 部落内のスギ・マツ類の混じったケンタ材にはシラホンヒゲナガコバネの這い回る魅力的な姿も多く見られた。また, エゾトゲムネもオヒョウの枯枝に集まる習性が判り, 比較的多数が採集されるなど(湯ノ花温泉付近), 例年以上の成果があった。

一方, 社会人勢もようやく息を吹きかえし? 6月25日・7月2日の両日には静岡県安倍峠へ草間慶一・露木繁雄・木村欣二・松本忠之・高桑正敏氏らが訪れた。目的はヤマトヒメハナだったそうだが, 採集されたのはフジヒメハナ(5♂♂1♀)で, 富士山以外で本種が採集されたのは今回が初めて, 同時に得られたヘリグロソハナ(木村氏)の記録も面白く, 本州では富士山・天城山・紀伊半島に次ぐものであろう。

☆なお, 今年静岡県下で採集された下記の種も記録として興味深いもの。

フタスジカタビロハナ(富士山, 小宮次郎氏), クビアカハナ・タカオメダカ・ヤマトシロオビトラ(以上寸又峯, 松本忠之氏), ミヤマルリハナ・カエデヒゲナガコバネ・カラフトヒゲナガ(本種のみ'71年)・キボシチビ(以上静岡市洞慶院など, 出口可能氏)

○島嶼の大戦果より(1)

—伊豆諸島・対馬・下甌島—

地元にも多くのカミキリ屋を控えていながらも伊豆諸島



左: 高桑正敏氏 右: 酒井香氏

は交通の便が悪いためか? はたまた, 食指をそそる珍品のいなかったためか? 訪れる人も稀だったのだが, ここ数年, 有志達によりかなりカミキリ相も解明され出した。特に今年は神津島・御蔵島での成果が大きく, 従来ほとんど資料のなかった神津島へは7月1日~3日, 高桑正敏・酒井香氏が訪れ, ノコギリ・サビ*・ピロウド(ミクラピロウドとの中間型?)・トゲバ*・*Rhodopina* sp.・台湾メダカ*など計23種を採集(*印は伊豆諸島初記録)。また, 「秘境」と呼ばれている御蔵島では酒井香氏(7月6日~13日)・斉藤秀生氏(7月31日~8月4日)により, 伊豆諸島初記録のコバネ1♂(subsp. *insularis* と思われる個体)を始め, アラカワシロヘリトラ・ミクラチビ・オオキハネナシサビ・イズニセピロウド・クモノスモンサビ・*Rhodopina* sp. はいずれも多く, ベーツヒラタ(3♂♂1♀)・トカラヤハズ・ミクラピロウド・ドイなども採集され, 大戦果をあげたがハネナシチビだけは依然どの島からも得られていないようだった。

対馬も今年は収獲が多く, ベニバハナ1♂(対馬2頭目, 足立一夫氏)・ムネホシシロ1♂1♀・オオシロ5exs.(共に酒井香氏)以外にミスジヒメハナ・ベーツヤサ・スネケブカヒロコバネ・ヨスジアオなどは多数採集されたが, 何といても興味深いのは初記録の *Obrium* sp. とヤマトチビコバネで, 前者はサドチビアメイロに極似した日本未記録種で宮原道則氏による(13exs. 比田勝)。後者は一見すると前胸などが本州産の個体と異なったような感じを受ける。足立一夫氏により5exs.採集された。

九州のカミキリ屋諸氏にも下甌島は未開の地であったようだが, 5月上~中旬宮原道則・入江平吉氏の調査により興味深い種が得ら



宮原道則氏

れ、おおいに注目を浴びた。ヘリウスハナ・ミヤマクロハナ・タケウチヒゲナガコバネ・コジマヒゲナガコバネ・ズマルトラ・*Pseudale* sp. (新種)・シロスジドウボソといったものがそれだが、他に、たとえば触角の節だけ白いが、体型その他はニンフハナ?とか、一見マルオカホソハナ?風のホソハナとかおかしなものも得られ、今後の調査が期待される。

○島峡の大戦果より(2)一琉球列島

ここ最近、カミキリ屋の南の島々に対する憧れは大変なもので、ブームとも言うべき人気を呼んでいるが、かつての本命屋久・奄美は全盛期を越えたのか陰が薄くなり始め、代って今年の焦点となったのは沖縄本島・石垣島方面だった。

トゲウスバ2 exs. (安房, 杉野広一氏他)・コバネゴマフ1♀・*Rhodopina* sp. (マルバネコバネに似た新種, 以上白谷, 那須敏氏)・オニホソコバネ2♂♂・ケブカトラ1 ex. (以上栗生, 酒井案理氏)・ヤクシマヨツスジハナ1♂1♀ (宮之浦, 長尾悟氏)……が屋久の主だったところと言える。初記録のリュウキュウチビコバネは尾之間と栗生で計5頭得られたが、奄美産のものとは若干異なり、ヤマトチビコバネとの関連性を知る手がかりとなるかもしれない。九州本土における本属の発見が期待されよう。なお、ヤクシマホソコバネは零敗だったことも付記しよう。

奄美は例年と大差なく、タブの切株などの材中(かなり固い部分)からアマミニセクワガタが多数得られたこと(八津野), アマミトゲウスバが6~7頭八津野・湯湾でブタンガス燈に飛来したことの他はこれといったニュースはなかったが(アマミホソコバネは1頭のみ), 隣の徳之島では杉野広一氏がアマミモンキを始めとして *Nortia* sp., アマミトビイロ, リュウキュウチビコバネ・キュウシュウチビトラ・カノコサビ・アマミピロウド・アマミハリムネモモトなどの初記録を出すという快挙をなし、また、高桑正敏氏も1月同島より持ち帰ったタブの立枯れ材よりウスグロホソバネ12♂♂6♀♀等を羽化させている。

沖縄本島では原記載以来(1959年)記録の絶えていたリュウキュウモウセンハナが2♂♂採集され(入江平吉氏), イシガキチビトラのごとき珍品も数頭(初記録), アマミモンキ1 ex. (初記録)などの大物が、また、少なかったオモロピロウド・オキナワフト・ムモンツヤアラゲサビも多数採集された。

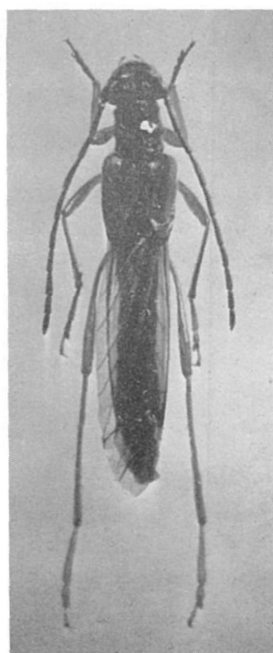
採集者のほとんど寄り付かない宮古島にも入江氏は訪れ(5月下旬), ミヤコリンゴ8 exs.・タイワンメダカ1 ex.・サキシマウスアヤ相当多数などを採集している。

石垣島は一番の焦点だった。沖縄本島以南のカミキリにはまだなじみの薄い人も多いことと思うが、実に大変な成果であった。かつての珍品も軒並みの下落ぶり、そのいきおいは2~3年前の屋久・奄美のそれ以上の迫力があつたとか。まずはコジマクロオビヒメ・ハッタアメイロ・リュウキュウヒメアメイロ・ヒロオビオオゴマフ・アナバネヒゲナガ・イシガキフト(旧シロオビピロウド)・イシガキクワなどがメタメタ多数, イシガキトゲウスバ・フトヒゲウスバ・ムネスジウスバ・サキシマトゲヒゲトラ(やはり *ohbayashii* SAMUELSON が本種と混生しているようだ)・イシガキトガリバサビも少なくなかったというからその程度もしれよう。原記載以来採集されていなかったというオキナワゴマフ *yayeyamai* も相当多数採集されたし, イシガキゴマフによく似るが、触角の第5節基半に白色毛を持ち, 前胸に2つの隆起のある *Mesosa* sp. も多かった(6~7年前より得られていたのだが, あまり知られていないので記しておく)。その他にもヤエヤマホソバネ・オガサワラチャイロ・フタツメイエ・コゲチャフタモンヒゲナガ・オキナワサビ・ヒゲナガヒメルリ・*Glenea* sp. (スジシロに似る?)……など枚挙にいとまのないほどだ。

○本州に日本未記録のネキがいた!!

これぞ「燈台下暗し」のきわめつけと言わねばなるまい。南アルプス二軒小屋(東俣)の標高1900m地点で、集木場のトウヒ衰弱木に飛来したネキはカラフトホソコバネ *Necydalis sachalinensis* MATSUMURA et TAMANUKI そのものだったのだ!(8月5日, 鈴木和利氏)

思えば、1969年のアマミホソコバネに始まって1970年のヤクシマホソコバネとウスリーホソコバネ, 1971年のアイスホソコバネと、ここ4年間というものの毎年ネキの新種や日本未記録種が出ていくわけで、さらに本州産のネキ5種が珍品からファミリアなものとなっていく



南アルプス東俣産
カラフトホソコバネ♀

いきさつといい、ネキに関する進境ぶりは異常なほどでネキの魅力と人気が驚異を生んでいるとでもいうべきか。今年のカラフトホソコバネが特にカミキリ屋を驚嘆せしめたのは、いうまでもなく、昔からカミキリ屋のメッカであった二軒小屋で……という点で、誰にもまったく予想できなかったことだった。しかも、本種はこの1早の後、まるでカミキリ屋をあざけるがごとく、やはり大メッカである裏日光大沢の貯木場で1♂得られていたことが判明し(1971年7月下旬, 下村徹氏), さらに1972年も他に上高地で蝶屋が1♀採集していたとか?

♂は特にまぎらわしいものであるので、カミキリ屋諸兄には標本箱のネキ再点検を望みたい。これで日本産のネキはツヤホソコバネがホソコバネの黒化型となった今、計11種となった。

○北海道は「空ネキ」だった

昨年、アイヌホソコバネ etc.のネキが採集されたことは、今年、北海道に老若多数のカミキリ屋を呼びこむ原動力となったようだが、肝心のネキの方はさっぱりという体たらくで、「大山鳴動鼠1匹」ならぬ「ネキ0匹」とでもいうべきにビッタリの有様だった。

その代わりに?特記すべきことには、大珍品であったエトロフハナが知床岩尾別付近のハマボウフウ・ノリウツギ・ウド科植物の花上、流木などで相当多数採集されたこと(草間慶一・奈良一・小宮次郎氏らによる)、ムネモンチャイロトラが少ないながら同地や足寄付近で採集されたことがあげられよう。

○その他の話題……

カラフトホソコバネ以外にも、本州では大きな成果があがっていた。たとえば長野県下では、珍品 No.1のアカムネハナ1ex. (7月上旬, 扉温泉付近)を始め、クロサワヒメコバネ1♂(7月, 姫川谷中土)・ミドリヒメスギ2♂♂(7月下旬, 南アルプス)といったいずれもまだ両手の指で記録を数えるほどしか採れていないウルトラ珍品が採れてしまったし、クロサワヘリグロハナ1ex. (7月上旬, 上伊那横川峡……昨年も同地で2exs.得られている)も本州では相当稀なものだ。なぜか、9月下旬にいきなり活動を再開した早川広文氏ら松本むしの会の面々は、科学的に分析したビーティング法?でタニグチコバヤハズ・フジコバヤハズ・コバヤハズ・セダコバヤハズ(愛知県境茶白山・売木)を比較的多数採集、マヤサンコバヤハズにいたっては数100頭というから恐しい。

岡山県新見市井倉では7月上旬、ヤマグワ枯枝のビーティングにて多数のキバネアラゲが採集されたが、これ

も特記に値しよう(平田信夫・青野孝昭・那須敏・分島徹人氏らによる)。また、同じ頃辻啓介氏は隣りの兵庫県氷ノ山から持ち帰ったサワフタギ?より、キバネアラゲに非常によく似ているのだが前胸が黒くないというおかしなもの?を7exs.羽化させたのだった。

その他、愛知県で湯沢宣久・井野川重則氏により中部地方初記録のヤマトチビコバネ(定光寺)やキュウシュウチビトラ(豊田市猿投山)など。

愛媛県では松山市杉立でトゲウスバが少ないながら得られ、徳島県剣山ではヒゲジロホソコバネも1♂採れた(松村英一氏)。

水沼哲郎氏は台湾にてネキ3種(2種は新種)を始め、画期的な大戦果をあげられたそうで詳細の発表が待たれる。

* * * * *

末尾ながら、文中の似顔絵カットを書いて下さった木村欣二氏に感謝いたします。

(〒110 東京都台東区台東2-29-6)



辻 啓介氏

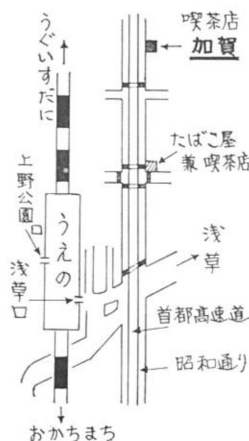
甲虫サロン (東京) へのお誘い

甲虫愛好者が毎週集まって甲虫談議に花を咲かせています。遠方の方々も、東京方面へおいでになる機会がありましたら、ぜひとも御都合をつけて出席されるようおすすめします。きっと楽しい雰囲気が入られることと思います。

場所: 喫茶店「加賀(かが)」
(Tel. 03-841-4878)
(国鉄上野駅浅草口より5分)

日時: 毎週木曜日夜7~11時

(ただし、祭日は休み)



編集後記

○ELYTRA は今後どのように育っていくか。

採集記録主体という従来の同好会誌的パターンにとどまるか、それとも全国の甲虫愛好者を育てる登竜門となりうるか、はたまた活版という利をいかして日本の甲虫界の中で文献として重要な位置を占めうるか、ひとえにそれは会員各位の態度と努力にかかっている。

省みるに、昆虫界の中での甲虫部門は、他と比べてその記録発表という面においても大幅に遅れている。それは、カミキリやオサムシを除けば地味な存在のものばかりという意味あいのせいもあるだろうが、記録発表の機会に恵まれていなかったとする方が当を得ている。愛好者の少ない甲虫部門だと、ともすれば専門家の独壇場となってアマチュアの活躍する余地は少ないし、蝶が主体とならざるを得ない雑誌に地味な甲虫の分布記録などめったに載るものではない。一方、既存の学会誌は原記載の掲載に追われ、分布記録は“うめくさ”的地位でしかない。だからここでもアマチュアの関与する余地は恵まれない。

我々はアマチュアも積極的に参加できる甲虫専門誌、ELYTRA を世に出した。甲虫の記録を発表する機会はここにある。おおいに勉強され、どしどし発表されるよう期待する。

そういった中での ELYTRA 第1号、これは不満であるが、しかし最初はこれで良いと思う。まず何よりも大事なことは、将来を見越した上で何はともあれ会誌を作成することであり、それを発展させていくのは今後の努力だからである。内容を見ても関東の同好者によるものがほとんどであり、またカミキリがその大半以上を占めている。これが大幅な頁数の増大とともに、全国の同好者からの記事で埋まり、カミキリ以外の甲虫部門の投稿も活発になれば、もくろみの第一段階は成功したと言えよう。まずは第一段階を越えねばならない。

○短報欄のタイトル名を募集!

本誌5頁を見てほしい。8頁にかけては短編の記録がまとめられているが、これらグループには

タイトル名が与えられていない。タイトル名がなくとも別におかしくはないが、やはり名なしのゴンベエでは少々ものさびしいということで、編集子一同がないチエまでしばって考えあぐねた末、皆さんのアイデアに期待することで着いた。何とかして“虫ペン”に劣らぬ名をつけようではないか。よろしく願いたい。

締切は来年1月末、会事務局または編集子まで。

○最後にふたことみこと

甲虫専門の会を作ろう、と騒ぎだしてから1年近くも経過してしまい、早くからこの会へと原稿を書いて下さった人たち、また会設立について御教示下さった方には心からお詫びを申しねばならない。来年からは ELYTRA の年3回発行というスタイルを何とかして確立し、会員の皆さんにも安心してもらおうと考えている。

ただし、それには皆さんからの投稿のいかにがかってくる。投稿原稿がどんどん舞い込んできて、とても会費内では全部を載せきれない、というもったいないほどありがたい気分にならせてほしい。

表紙裏の投稿規定を参照のうえ、会事務局まで原稿をお寄せ下さい。

また、会員数が多くなればそれだけ ELYTRA の頁数を増やすことができる。皆さんのお知りあいの同好者の中で、まだ日本鞘翅目学会のことを知らない人もたくさんいることと思う。折りにふれぜひとも入会を勧めて下さることをお願いしたい。

(高桑正敏 記)

ELYTRA 第1巻 第1号

昭和48年11月25日 印刷
昭和48年11月30日 発行

編集者 高桑正敏
発行者 草間慶一
発行所 日本鞘翅目学会

Japanese Society
of Coleopterology

東京都台東区東上野4-26-8
福田惣一方(〒110)

印刷 徳大和印刷

ELYTRA 第1巻 第1号 目次

原 著

草間慶一 (KUSAMA, K.): *Necydalis* 属の研究史 (I) (Historical Review of *Necydalis* (Cerambycidae) (I)) 1

高桑正敏・畑山武一郎: 屋久島産ホンハナノミ属の未記録種について..... 5

秋山黄洋: 北海道苫小牧におけるエゾアオタマムシの採集例..... 5

藤田 宏: マダラクワガタの採集例と食樹に関する一知見..... 5

小笠原隆: 四国におけるマメクワガタの記録..... 6

小笠原隆・松村英一: 四国のカミキリ5種..... 6

下村 徹: 奥日光大沢でカラフトホソコバネカミキリを採集..... 7

斉藤秀明: 秋田県でツシマムナクボカミキリを採集..... 7

糸久仁雄: 北海道にてコジマヒゲナガコバネカミキリを採集..... 7

安井正・生島典明・下村徹: 北海道におけるナカバヤシモモプトカミキリの採集例..... 7

森祐二郎: 奥多摩でトワダムモンメダカカミキリを採集..... 8

藤田 宏: 秋期ビーティングによるカミキリ2種..... 8

高桑正敏: 山梨県大菩薩におけるヒゲナガヒメルリカミキリの記録..... 8

酒井案理: 屋久島におけるカミキリ2題..... 8

ふじたひろし: 1972年カミキリ界の総括..... 9

編 集 後 記.....13

表 紙.....木村 欣二